
赤の蒼穹

斎藤 レン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤の蒼穹

【Zコード】

Z2008A

【作者名】

斎藤 レン

【あらすじ】

主人公、佐藤瑛司と武田由紀の物語。二人には一体どんな運命がまっているのか。

第一話・由紀（前書き）

これから前書きにブログ感覚で色々書こうと思います。
では始めまつしょい！

最初は普通の恋愛物にしようかと思いましたが、それじゃあつまんないんでスリルも加えようと思います。
つまんなければスルーしてかまわないので、よろしくお願ひします。

第一話・由紀

八月のまだ蒸し暑い日の夜に由紀はやつて來た。

『やつほ～瑛司。勝手にあがるけどいいよね？お邪魔します～』
由紀は俺の許しを得ずにすかすかとあがつて來た。

『おーおー、いらっしゃまえでも家主の許可も取らずに勝手に入つて
来るのはどうかと思うわ。』

俺は少し嫌味っぽく見て見た。

『別にいいでしょ、知らない仲じゃないんだし。お土産も買つて來
たんだから文句いわない。』

そういうて由紀は俺にお土産の入つている袋を投げた。

袋の中を見て見ると案の定、いつもどおりの饅頭が入つていた。
俺は少し嫌な顔をして“なんでいつもこれなんだよ”と心の中で思
つた。

すると由紀が『あー今、“なんでいつもこれなんだよ”って思つ
てたでしょ？』

……なんでわかつたんだ？…俺は少しひくりした。

『瑛司とは小学校からずっと一緒にたんだからそのぐらいわかる
よ。』

由紀は自信満々についてのけた。

『何だか心の中を覗かれてるみたいで嫌だなあ…。』

『ふふふ…。そこまではいかないけど隠し事やないしょこしてるので
となんかはすぐに分かるよ。』

『勘弁してくれよ～…』

そんな会話をしながら俺たちは由紀の持つて來た饅頭をたべていた。

『あれ？もうこんな時間じゃん。私、そろそろ帰らなきゃ。』

時計を見ると既に夜中の〇時をすぎていた。

俺は笑いながら、

『じゃあ家まで一緒に送つてつてやるよ。か弱いお姫様一人で帰す

訳にはいかないからね（笑）』

『ふふふ…、別にだいじょぶよ。下でタクシー拾つて帰るから。それに瑛司なんかに送つてもらつたら後で何されるか分かつたもんじやないしね（笑）』

『おいおい。人を見境のない獣みたくないなよな。俺はそこまで最低な奴じやないぞ。』

『わかつてるわよ。からかつてみただけ。じゃあそろそろ行くね。じゃあね～。』

『おう。気をつけて帰れよ～』

しかし、その別れが後で思いも寄らない状況に陥らせる「」とを今俺は分かっていなかつた…。

『ふああ～…。眩し…』

カーテンの隙間から入つて来る朝の日差しによつて俺は目を覚ました。

だが低血圧なせいで、なかなか布団から起き上がれない。

『～そろそろ起きないと学校遅刻すんなあ。～』何て事を心の中で言つてみると全く効果はなかつた。

まあ大学生の俺にとって1時間目に遅れるだけの事なので別にどうとも思わないが。

そろそろ体が慣れて来たみたいなので、とりあえず起きてテレビをつけた。

『…“昨晩、辰富市咲谷町で殺人・殺人未遂事件が起こりました。

”』

『あれ？確かに咲谷町つて由紀の住んでる町だよなあ。何だか物騒だなあ。』

『…被害者は、タクシーの運転手の……。そして龍富大学一年生の武田由紀さん…』

『…………』

俺は一瞬耳を疑つた。

そしてさらにニュースが流れる。

『……運転手の方は背中を刺され即死。武田さんの方は腹部を刺され意識不明の重体との事です……』

何がなんだか分からなかつた。悪い夢だと思い由紀の携帯に電話をしてみる。

『もしもし。』

ほら見る。由紀は電話に出た。やはり夢なんだ『れは。

『あれ？もしかして瑛ちゃん？懐かしいわねえ。覚えてる？由紀の母よ。』

その声は由紀の母親だった。しかも少し涙声だつた。

『えっ？それって由紀の携帯ですよね？由紀はどうしたんですか？』

その言葉と同時に伯母さんは泣き出した

『……由紀は……意識不明の重体で……龍宮病院に……入院してます……。』

頭の中が真つ白になつた。

そして俺は龍宮病院へと急いだ。頭の中が真つ白になつた。
そして俺は龍宮病院へと急いだ。

第一話・由紀（後書き）

いきなり急展開～！

ショッパを見てなんだこの甘ったるいのー！とか思つた方！この後どうなるかは作者のみぞ知るつて感じですね（ー+）ニヤリツまあじつくり見てやってください。

第一話・違和感（前書き）

連載は初めて作るんで、所々変ですが気にしないでください。
では第一話開始です。
どうぞ！

第一話・違和感

「すいません！」

昨日ここに運び込まれたひとで武田由紀つてこの子の病室を教えていただきたいのですが！」

「その方でしたら401号室になります。」

妙に落ち着きながら話す看護婦に苛立ちを感じながら病室へと向かつた。

「由紀～！～」

俺はおもこきり病室のドアを開けた。

「あら？ 瑛ちゃん来ててくれたの？」

おばやんだ。

涙を堪えながら氣丈に振る舞つてこむといひが見ていてつらくなつた。

「由紀は…どうなんですか？」

「とうあえず手術は成功したけど、まだ田を覚まさないよ…。」

俺は伯母さんの話を聞きながら寝ている由紀のそばにいった。

「お医者様の話では、もしかしたらこのまま田を覚まないかもしれない…って。」

伯母さんは泣き出した。

俺は呆然と立ち尽くすしかなかつた。

ベットで寝ている由紀は、普段見慣れている由紀なのだが、俺はなぜか違和感を感じてしまつがなかつた。「由紀？…由紀？…ほら…来てやつたぞ。なあなんで黙つてるんだよ…。起きろよ。なあ？…頼むから起きてくれよ…。」

俺は由紀の手を掴んだ。しかし、その手は握り返してはくれなかつた。

「伯母さん、すいません。昨日俺がちゃんと由紀を送つていればこんなことにならなかつたんです！」

俺は悔やんでも悔やみ切れなかつた。あの時の自分の愚かさに腹が立つた。

「瑛ちゃんのせいじゃないわよ。だからそんなに自分を責めないで……。」

伯母さんはそういうってくれたが、俺はその言葉をすんなり受け入れることはできなかつた。

第一話・違和感（後書き）

うわあ～どうなるか分からん～（――；――
自分でもこの後どう連載しようか分からない（^――^）
とりあえず由紀がこの後どうなるかでしうー。
もしかしたらすごい話になるかも知れません。
どうぞ第三話気長に待つてください（*^-^-*）（待つてく
れる人いればいいけど……）

第三話・変化（前書き）

読んでくださっている方々。心からありがとうございます。作者は現在夏休みにもかかわらず、受験に忙しく全くとことつていいほど執筆活動が進みません（^ー^）

何とか時間を見て書きますので、見てくださっている方はどうか私めを見捨てないでやつてください。お願いします。

てなわけで。

第三話始まるよ～！

俺は伯母さんに挨拶をし病室を後にした。

俺は病室の前でただただ由紀の意識が回復することを祈った。
あれから2ヶ月がたつた。

由紀は一向に目を見まさない。

医者についてにはもう傷は完全に完治し、身体的には何も問題はないらしい。

ただ…精神的な面で問題があるということらしい。

多分、今由紀の中ではあのときのつらく苦しい記憶が何度も何度も流れているのだ、できることなら俺が代わってやりたい！俺が由紀の苦しみを救つてやりたい！だが…そんなことできるはずがない。だからこのやりきれない気持ちに憤りを感じるのだ。俺は自分のこの暗い気持ちを振り払い、由紀の待つ病室へと足を運んだ。

今日は伯母さんは来ていなにようだ。

俺は持つて来た花を花瓶に差し込んで由紀の眠る枕元のイスに座つた。

由紀は2ヶ月前と全く変わっていない、綺麗な黒髪は耳を隠すぐら
いまでのセミロングで、俺は髪の毛には疎いのでよく分からぬが、
シャギーカットとかいう髪型だと由紀は言つていた。

顔立ちは一般的にいう美人の部類に入る。

体型は、俺が言うのもなんだがナイスバディだ。

この前由紀に買い物に行こうと言われ待ち合わせしたときに遅れて
行つたら、周りいた男達が由紀のことをちらちら見ているのを何度
か見たことがある。

性格はさばさばしているので友達にはかなり慕われている。
しかしさばさば過ぎていいせいか俺とは喧嘩が絶えない。小さい
頃から何度も喧嘩したことか…。

俺はついついそんなことを思いながら笑ってしまった。

笑って笑って、気付いたら涙が出ていた。大粒の涙を流していた。

「変わつていないつことは変化がないってことだもんな…。由紀頼むから田を見ましてくれ。そして俺にお前のあの笑顔をもう一度見せてくれよ…。」

俺は今更気付いた。

高校の頃から、いや中学の頃から、いや…もつともつと前から、俺は…武田由紀を心から愛していたことに…。

そして俺はそのまま泣き付かれて由紀の枕元で眠ってしまった…。

第三話・変化（後書き）

はあ～。疲れました。受験生なのにゲームセンにてく自分でつかれました…。

マジで逝つた方がいいと思つています。でもガン種おもしろすぎです、やつてハツスルします（－ ＋）ニヤリッこんな肩に叱咤激励してくれる方募集中です。．．．＊＊＊。

そろそろ後書きに入ります。第三話はこれから入る第四話の伏線です。第四話はすゞ～ことになりますよ～。楽しみにしてください（＊^__^＊）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2008a/>

赤の蒼穹

2010年10月25日01時23分発行